

1. 前期旧石器研究の進展

芹 沢 長 介

(東北大学名誉教授・東北福祉大学教授)

1949年に群馬県岩宿が相沢忠洋によって発見され、関東ローム層中に石器が包含されているという事実がはじめて確認された。関東ローム層は更新世末期の火山活動によって噴出された火山灰の堆積であり、したがってその中に含まれている石器は更新世末期に人類によって作られた道具ということになる。これは更新世末期の日本にも、大陸と同じように人類が住んでいた明確な証拠であり、日本にも縄文時代以前に旧石器時代の歴史があったことを、私たちはここではじめて認識することになった。

関東ローム層は古い方から多摩ローム、下末吉ローム、武蔵野ローム、立川ロームという4枚の層によって形成されていて、最上位の立川ロームは約30,000年前から10,000年前の間に堆積したことが、放射性炭素法による年代測定によって明らかにされた。岩宿遺跡の発見いらい10年を経ずして北海道から九州に至る日本の各地から立川ローム期の遺跡が発見されるようになり、その数は数百カ所から1千カ所をこえるまでになった。しかし立川ローム期以前一すなわち3万年前より更に古い武蔵野ローム、下末吉ローム、多摩ロームの時期の遺跡は発見されず、気の早い研究者の中には「3万年以上前の日本列島には人間は住んでいなかった」と断言する人さえあらわれた。

1964年の早春、大分県速見郡日出町の早水台遺跡が、大分県教育委員会によって縄文早期の集落跡の解明のために発掘された。筆者は八幡一郎先生の指揮するトレンチに配属されたが、発掘終了の間ぎわになって掘り下げたトレンチの基盤直上から、石英脈岩と石英粗面岩で作られた石器が数点発見された。これらの資料は日本では未見の、しかもきわめて古い石器文化の存在を暗示すると考えられたので、同年4月に東北大学考古学研究室の仕事として基盤直上の文化層を発掘し、245点の石器と剥片、180点の原石および自然石を得ることができた。これらの資料を整理検討した結果として、石器の形態・製作手法・組成・材質などから見て、早水台石器は中国の周口店洞穴出土の石器に関連をもつものであらうと考えるに至った。その年代については、遺跡が下末吉段丘の上にあるという中川久夫助教授の考えをよりどころとし、下末吉ローム期の下位一実年代でいえばほぼ12万年から10万年前におかれるであらうと推定した。日本における「前期旧石器」の研究は、このようにして発足したのであった。筆者はこの時から、後期旧石器時代(約1～3万年前)に対して、3万年以上前にさかのぼる時代を日本の前期旧石器時

代として区別することにした。したがって日本の前期旧石器時代は、大陸の中部旧石器時代(3.5~8万年前)と下部旧石器時代(約8万年前からほぼ250万年前まで)を包含することになる。日本に中期旧石器時代を設定しないのは、まだ中期と前期とを区分するだけの資料が揃っていないからである。

早水台の前期旧石器についての筆者の研究は、残念ながら日本の大部分の考古学研究者に理解されず、ある人はことさらにそれを「長介石器」とか「神様石器」と呼んでもの笑いの種にしようとしたし、その尻馬に乗った若い研究者もいた。しかしシベリアや中国の旧石器研究の専門家たち—オクラドニコフ、ラリチェフ、そして裴文中らが筆者の報告書を正当に評価し、大陸と日本との文化交流についての論文の中に詳しく早水台の資料を紹介してくれたのは嬉しかった。その後筆者は栃木市星野遺跡と群馬県岩宿遺跡ゼロ文化層の発掘調査をおこない、前期旧石器の資料集積につとめたのだが、やはり日本国内の研究者たちからは冷たいまなざしで迎えられるだけであった。

早水台の発掘から16年目の1980年以降になると、宮城県下から前期旧石器時代の遺跡が集中的に発見されることになった。最初に発掘されたのは仙台市山田上ノ台遺跡であり、仙台市教育委員会は約3万年前の川崎スコリア層よりも下位にある地層中から約30点の石器を発見した。翌年1981年には石器文化談話会によって玉造郡岩出山町座散乱木遺跡の発掘が行なわれ、第13層上面および第15層上面から計64点の石器が出土した。そして第15層の実年代がフィッシュン・トラック法と熱ルミネッセンス法を用いて測定され、約4.1~4.4万年前のものであるという結果が出た。さらにその後になると、仙台市北前遺跡、多賀城市志引遺跡、黒川郡大和町中峯C遺跡、古川市馬場壇A遺跡等がそれぞれ仙台市、多賀城市教育委員会、宮城県教育委員会の手によって発掘調査され、いずれも目ざましい成果をあげている。とくに中峯C遺跡では最下層のⅦ層から110点の石器が出土し、その実年代は熱ルミネッセンス法によって14万年前から37万年前の間にあると測定された。更に馬場壇A遺跡でもこれまでに20層上面から102点の石器が出土したが、その直上を一迫軽石層(約12~14万年前)がおおっていた。しかも同層から出土した石器の刃部に残されていた脂肪酸の分析によって、これらの石器がナウマン象やニホンシカの解体に用いられたことが判明し、それらに残留磁化の測定により炉跡の存在も推定されている。

青葉山遺跡B地点はこのような状況の中で発掘が行なわれたものであり、18万年前という年代が測定された11d層の上面から石器が出土したということは重要である。関東地方南部の多摩段丘をおおう多摩ロームの年代については、フィッシュン・トラック法によって14.3万年前から28.5万年前の堆積物であるとされている。しかし関東地方ではこの多摩ローム期に属する人類遺跡は未発見であるので、多摩ローム期の人類の足跡はまず宮城県において明らかにされつつあると言ってよい。10万年をさかのぼる人類は原人(ホモ・エレクトゥス)の仲間であり、

青葉山遺跡B地点は日本の原人がのこした生活の痕跡であると考えてよい。残念ながらまだ日本では古人類化石の確実な発見がみられないのだが、原人の遺跡があるからには必ずどこかに原人の化石が埋れている筈である。スコップの先から誰がいつそれを掘り出すか、これは考古学研究者の将来の大きな課題である。